

俺は
エー
ジ
ェ
ン
ト

装画 北谷しげひさ

装幀 高柳雅人

紺地に白く「大衆居酒屋　ますい」と染め抜かれた暖簾のれんをはぐり、少したてつけの悪くなつた引き戸を、俺は開けた。

「いらっしやい」

大将のかすれた声と、

「いらっしやいまし」

という、甲高いおかみさんの声がかぶる。

コの字型のカウンターだけの小さな店だ。すべての席が埋まっても十五人しか入れないカウンターの途中で、大将が包丁を使っている。

奥にはおかみさんが立ち、空豆にハサミを入れていた。客はひとりだけ。毎日のようにこの店にいる、七十過ぎの白川しろかわという爺さんじいだ。夏場はたいてい着流しに雪駄せったという、ひと昔前の極道のようないでたちで端っこの席にいる。

「どうだった？　村井ちゃん」

おかみさんが訊きいた。

「駄目」

俺は行って、手前側の角に腰をおろした。

「いくら負けたの」

「一万五千円」

大將が首をふりながら、おろしたアジの皮をひいた。

「あそこはでないだよ。やめるか、よそのパチンコ屋を捜しなよ」

「だって商店街にはあそこ一軒っきゃないんだからしょうがないじゃないねえ」

おかみさんが俺のかわりにいい返し、

「生ビールでいいの？」

と訊ねた。俺が頷くと、サーバーの下にジョッキをかざす。

駅から東にのびる道路沿いに約二百メートルほどの長さで商店街があり、パチンコ屋はその始まりにある。この「ますい」は、パチンコ屋から五十メートルほど先にあり、二階は大將とおかみさんの住居だ。向かって右隣が、喫茶店「コスモス」、左隣は洋品屋だったが、去年の暮れに店じまいした。大將の話では、店番をしていた婆ちゃんが脳血栓で倒れ、寝たきりになってしまったという。サラリーマンをやっている息子が店を売りにだしているが買い手がつかないらしい。

商店街には、同じようにシャッターをおろしたままの店が、あと五、六軒ある。

商店街の先には、アパートやマンション、小さな一戸建てが密集していて、決して人口が少ないわけじゃないが、駅の西側に大きなスーパーができたせいで、住人は皆そっちに流れていくらしい。

東京の東側、都心から電車で一時間はかからないが、千葉県には三十分足らずで着くという、

いわゆる「下町」の典型的な商店街なのだ。ひとり暮らしの高齢者が、朝から何するでもなく、商店街をうろつき、懐ろに余裕のある爺さんは、陽の高いうちから居酒屋で飲み始める。

白川という爺さんもそのひとりだ。のびた白髪をオールバックにして、不精ヒゲも白い。

おかみさんがつきだしの空豆をおいてくれるのを待って、俺はピアジョッキをもちあげた。

「いただきます」

大将と白川の爺さんにいった。白川さんは冷酒の盃をちょいともちあげた。赤い江戸切り子のグラスで、「ますい」にはそんな洒落た盃はなく、冷酒用にと白川さんがもちこんだものらしい。

俺はショルダーバッグから文庫本をとりだした。古本屋の百円均一で仕入れた「エージェン ト・ハリー」シリーズだ。

大将が首をのぼした。

「また翻訳ものかい？ 好きだねえ」

「村井ちゃんは勉強家なのにね。なんで正社員にしてもらえないんだろう」

おかみさんがいう。

「してもらえないのじゃなくて、なりたくないんだよ」

俺はいい返した。

「でもさ、じき三十だろう。お嫁さんももらいたいじゃない。それにはやっぱり——」

いいかけたとき、引き戸が開いた。

「センセー、いらっしやい」

おかみさんの声で、客が誰だかわかった。パチンコ屋の先の一戸建てに住んでいる大西さん

だ。あんまり売れてない、六十代の推理作家で、白川さんと同じく、ほぼ毎日のように「ますい」に現われる。それを知っている俺も、ほとんど毎日、ここに顔をだしているのだが。

「おっ、白川さん、それにフリーターか」

大西さんは俺をフリーターと呼んでいる。

「何読んでるんだ」

俺は文庫の表紙を見せた。

「好きだねえ。またスパイものか。でもその『エージェント・ハリー』シリーズは、おもしろかったのは、三巻めくらいまでだろう。それ何巻?」

「七巻」

「じゃ、駄作だ」

商売柄、さすがにミステリには詳しい。

「でもいいんだ、好きだから」

大西さんはレモンサワーを頼み、俺と白川さんのあいだに腰をおろした。

「珍しいよな、本当に。六〇年代のスパイアクションがそんなに好きなんて。今じゃ古本屋以外じゃ、まず見ない」

「俺の憧れなんですよ」

「憧れ」

「スパイになりたかったんです。あの時代に外国で生きてたら、絶対スパイになってた」

大西さんはけたけたと笑った。

「ないない。確かに東西冷戦構造の時代ではあるけど、ピストルぶっぱなしたり、シャンペン

とキャビアで美女を口説くようなスパイなんて現実にはいなかったって」

「そうなんですか。憧れなんだけども、ジェームズ・ボンドとか……」

「それは映画に毒されてるよ。イアン・フレミングの書いた007シリーズは、意外に地味な話とかあるんだぜ。むしろ、007のヒットにあやかっただけで、やたらにでたペーパーバックのスパイクジョンが、フリーターの好きな世界だろう。ドンパチとセックスで売ろうって、柳の下ドジョウがそれこそ何百、何千冊とあの頃はでたんだけ。テレビじゃ『0011ナポレオン・ソロ』とか、『ジョン・ドレイク』とかやって、西部劇でまでスパイクジョンを作ったくらいだ。古きよき時代」

大西さんはぼっさりと切った。

「なんですたれちゃったんすかね。俺も好きでよく見てたんですよ、『ナポレオン・ソロ』。

『オープン・チャンネルD』なんちゃって」

大将が話に加わってきた。

「やっぱり一番大きいのは、連の崩壊だね。スパイ小説のブームの頃は、東西の対立軸がしっかりあったから、自由主義陣営を善玉、社会主義陣営を悪玉にして、物語が書きやすかった。

西側のスパイをヒーローに仕立てて、東側に残酷な殺し屋だの、悪女だのを配置すれば、簡単に勧善懲悪ストーリーができちゃったわけだ。そこに秘密兵器や美女をからめさえすれば、本は飛ぶように売れたみたいだ」

「じゃその時代なら大西さんもベストセラー作家だ」

俺がまげっかえすと、

「もちろん」

大西さんは大きく頷いた。

「あの時代はね、本もよく売れたらしい。作家も出版社もずいぶん贅沢ぜいたくだったって話だ」
俺は首をふった。

「生まれるのが遅すぎたな。五十年早く生まれていたら」

白川さんを見た。

「白川さんなら、その時代を知ってるでしょう」

白川さんはにこりともせず、

「まあね」

とだけ答えた。極道みたいな格好に似合わず、物静かで、俺や大西さんの会話に加わって
ることはまずない。

「白川さんもあれですか。ショーン・コネリーとか、ディーン・マーチンにかぶれたん
ですか」

大西さんが訊ねると、

「ディーン・マーチンで歌手じゃないんですか」

大将が口をはさんだ。

「俳優だ。『誰かが誰かを愛してる』などのヒット曲もあるんだけど、『サイレンサー 殺人部
隊』とか『サイレンサー 待伏部隊』といったスパイアクション映画の主演もしているんだ」

「へえ、そうなんですか」

「その前にはジェリー・ルイスと組んで『底抜け』シリーズという、喜劇映画のヒットシリー
ズをやっていた」

白川さんが静かにいった。

「そうだ、忘れてた」

大西さんがいった。

「ディーン・マーチンはそっちのほうが有名か」

『部隊』シリーズは、読みました。マット・ヘルムってスパイが主人公ですよね」

俺はいった。大西さんが頷く。

「でもコメディアンまでスパイものをやるのだから、その頃のスパイブームってすごかったんですね」

「まさにネコも杓子もスパイって時代だね。それも日本だけじゃなく、西側世界がすべてといつていくくらいのブームだった。でも、皆、現実にはあんなのはないってわかっていたよ」

「そうなんですか？」

俺は首を傾げた。

「現実にだって、CIAとかSISとかモサドって諜報機関があるじゃないですか。そこには破壊工作のプロフェッショナルがいたんじゃないですか」

「それはいたにはいたろうが、あんなふうにもいつもピストルを吊るして、撃ち合ったりとかはしていない。スパイというのは、情報を集めるのが仕事だ。潜入して盗聴したり、盗撮するとかはあったかもしれないが、実際の破壊工作は、軍の特殊部隊に任せると思うぞ。狙撃や爆破なんていうのは、兵隊のほうが得意だからな」

「夢、ないなあ」

俺はため息を吐いた。

「じゃ現実のスパイってのは、地味いな仕事ってこと？」

「めちゃくちゃ地味だろう。正体がバレちゃいかんから、家と職場を往復するだけで、目立つことは一切しない。仕事帰りに一杯やるなど、もつてのほか、と」

「なんだ、そうなのか」

「スパイに一番必要なのは、忍耐力、だろうな」

そのとき「ますい」の電話が鳴った。今どき珍しいピンク電話がある。

「はい、『ますい』でございます」

おかみさんが電話にでた。

「はい、はい。いらしてます……」

答えて、怪訝^{けげん}そうに白川さんを見た。

「白川さん、お電話です」

「私に？」

「ええ。お客さんの白川さんって」

「そうか、白川さん携帯をもつてないからな」

大西さんがいった。

当の白川さんは驚いたようすもなく立ちあがると、カウンターを回りこみ、おかみさんから受話器をうけとった。

「もしもし、電話をかかりました。白川です」

相手の声に耳を傾けた。それを大将やおかみさん、俺と大西さんは興味津々で見つめた。

白川さんが、電話とはいえ、ここの客以外の人間と話すのを見るのは初めてだったからだ。

昔の仕事や家族、友人の話をしたことは一度もない。

それなのに「ますい」にまで電話をしてきて、連絡をとりたがる人間がいたのだ。

だが白川さんは表情ひとつかえず、

「そうですか。了解しました」

とだけいって、受話器をおろした。

「失礼しましたね」

おかみさんに軽く頭を下げ、またカウンターの端っこに戻る。

「あの、大丈夫なんですか。何か緊急の用事とか」

大西さんが遠慮がちに訊いた。

「いやいや」

白川さんは盃に冷酒を注ぎ、首をふった。

「たいした用事じゃありません。私の家に電話をしたがつかないの、ここに付けてきた古い知り合いです」

「そうですか」

今度は俺が訊ねた。

「白川さんの古い知り合いですって、どんな人なんです？」

白川さんはすぐに答えず、盃を口に運んだ。それから首を回し、俺を見た。

「どんな人だと思うかな」

「え？」

あべこべに訊かれ、俺はどぎまぎした。

「いや、そんな……。わかんないですよ。白川さんのプライベートなこと、ぜんぜん知らないですし」

「スパイになりたかったくらいなんだ。想像力を働かせてみなさい」
静かに、しかしどこかおっかない口調で白川さんはいった。

「ええ!? それじゃ、えーと——」
俺は宙をにらんだ。

「昔、いっしょに働いていた人」

白川さんは否定も肯定もしなかった。

「それで、かけてきた理由は？」

「うーん、縁起でもない話かもしれませんが、同じようにいっしょに働いていた誰かが亡くなった」

「なるほど」

白川さんは頷ぎ、また盃を口に運んだ。

「どうです、当たってますか？」

白川さんは微笑^{ほほえ}んだ。整った顔だけは上品そうだが、どこかいかめしい。酔っばらって声を張りあげたり、足もとが怪しくなるような姿は、一度も見たことがない。いつも物静かにひとり飲んでいて、いつのまにかすっといなくなる。

考えてみれば不思議な人なのだ。「ますい」の大将もおかみさんも、白川さんの素性をまる
で知らないようだ。

「まあ、当たらずといえども遠からず、ですわね」

そういつて白川さんは今度は大西さんを見た。

「先ほどのスパイの話ですが」

「は、はい」

すっかり毒気を抜かれたようすで大西さんは頷いた。

「一番必要なのは忍耐力、と先生はいわれましたが、私が思うには、度胸だと」

「度胸、ですか？」

俺としては、こっちの質問の答をはぐらかされてしまったようでおもしろくなかった。だがスパイの話となれば、聞かずにはいられない。

白川さんはいった。

「スパイ、それも若者がなりたがっているような、特殊作業員、いわゆるスペシャルエージェントは、ありとあらゆる土地に、さまざまな人間に化けて潜入しなければなりません。ジェームズ・ボンドは、いつもジェームズ・ボンドと名乗っていますが、実際はそうはいかないでしょう。日本人だけではなく外国人に化ける必要もある。実在の別人に化けなければならないときもあるかもしれません。そうして潜入作業をおこなうわけですから——」

「なるほど。正体がバレたらどうしよう、なんてビクついてたら仕事になりませんか」

大西さんが頷いた。

「それで度胸が必要、というわけか」

「と、私なんかは思うわけです」

控えめに、白川さんはいった。

「だったら観察力も必要ですね」

俺はいった。大西さんが俺を見た。

「だってそうでしょう。いろんな人間に化けるのだから、それらしい立居ふるまいもできなかりゃいけない。だったら日頃から、観察しておかないと」

「そうだな。化けるのは、外交官やビジネスマンばかりじゃないものな。ときには麻薬商人みたいなとか、殺し屋のふりもしなきゃならない。フリーターもなかなかわかってるじゃないか」

「でしょう。でも実際はいないんですよ。やっぱり、映画や物語の世界だけなんですか」

俺は白川さんを見て、いった。白川さんは黙って微笑んでいる。

「でも、でも、もし実在するとしたら、いったいどんな人間がやるんでしょうね」

「まず、愛国心が強いことだ」

大西さんがきっぱりといった。

「CIAとかもそうだが、優秀で愛国心の強い人間を、大学在学中にリクルートするらしい。

敵国につかまって拷問されたり、莫大ばくだいな報酬を提示されても、決して裏切らないためには、国家に絶対的な忠誠を誓っていること」

俺は唸うなった。

「愛国心、か」

「見きわめにくいものではありませんね」

白川さんがいった。大將がだしたアジの叩たたきを箸でつまんでいる。

「口で国を愛する、というのは簡単です。特に他人が見ている前なら。しかし国家には実体があるようで、ない。家族や友人、恋人も、国家の一部ではありませんが、政治家や役人のような

連中のほうが、国家らしいといえ、国家らしい存在のわけです。そんな人間のために命をかけるでしようか」

「そいつは無理だな」

大西さんが空になったサワーのグラスをつきだしていった。

「やっぱり家族とか友だちのためのほうが、リアリティがある」

「そうですね」

俺は頷いた。

「結局のところ、自分の中で、国家をおきかえるしかないですよ。家族とか、故郷とかに」

「若者は、故郷はどこですか」

白川さんが訊ねた。大西さんは「フリーター」だが、白川さんは「若者」と、俺を呼ぶ。

「ええと、島根です。でももう、誰もいないのですけどね」

「いない、とは？」

「親類縁者が皆、早死にしまして。兄弟もいませんし」

「そうなんです。若いのに、独りぼっちなのよね」

おかみさんが口をはさんだ。

「でも寂しいと思ったことはあまりないんです。その辺が鈍いみたいで……」

その瞬間、白川さんの目に意味ありげな光が宿った、みたいな気が、俺はした。

「身寄りがいない、というのも職員には必要な条件です」

白川さんはいった。

「そりゃそうだ。嫁さんや子供のことを思ったら、命がけの任務なんてできないものな」

大西さんが頷く。

「それだけじゃないですよ。家族を人質にとられて組織を裏切ることを要求されるかもしれない。それってキツイじゃないですか」

俺はいった。大西さんがあきれたように首をふった。

「組織、か。スパイ物にはよくでてきたな。今どき組織なんて、なかなか使わない言葉だ」

「やっぱりいいな。あの時代」

俺はため息を吐いた。

「だからそれは実在しない時代なんだって。物語の中だけで、いくら五十年近く前に戻っても、秘密工作員がピストルもって走り回っていた現実はないんだ」

大西さんが首をふった。

「若者はその時代を知らないから、きっと幻想を抱いているのでしょ」

白川さんは微笑みを浮かべている。

「でもそれは日本の話でしょう。外国、たとえば東西ドイツの国境だったら、ちがったのじゃありませんか」

俺は反論した。

「そんなことがあれば、東側、ともかく、西側ではすぐにニュースになったろう。スパイは殺し合いなどしないものだ。殺すとすれば、仲間だ。裏切り者を秘かに暗殺する。それも銃とかじゃなく、毒とかを使って病死に見せかけたのじゃないかな」

「夢なさすぎです、大西さん」

「ますい」の中が大笑いになった。笑いがやむと白川さんがいった。

「おかみさん、お勘定をお願いします」

「あら、もうお帰りですか」

「ええ。さっきの電話で、でかけなけりゃならなくなりました」

「はい、承知しました」

おかみさんが電卓にかがみこむと、俺はいった。

「白川さん、ふだんここにすることを教えている人がいるんですね」

白川さんは俺を見た。

「そうですね。家かここか、私のいるところはどちらかですか」

「そういえば白川さんのお住居がどこか聞いたことがなかったな」

大西さんがいった。

「そのシンエイコーボです」

「ああ、あの五階建てのマンション」

大將がいった。白川さんは頷いた。

「あそこ、かなり前からありますよね」

「そうですね。私が越してきたときは、まだ『ますい』さんもなかった」

「えーと、うちが開店したのが十七年前で、その前はここは寿^す司^し屋^やだったんです」

「私が越してきたのは十八年前です」

おかみさんが顔をあげた。

「二千二百円です」

白川さんはカウンターにおいた巾着袋から財布をだした。近づいたおかみさんに金を払う。

そして、

「それじゃ、お先に」

と行って、店をでていった。

「不思議な人だな」

やがて大西さんが口を開いた。

「昔何をやってたのか、まるでわからない」

「何か、大学で教えていたことがあるって、以前おっしゃってましたよ」

おかみさんが、白川さんの使った器を片づけながらいった。

「大学教授。このあたりじゃないタイプだな」

「独り者みたいですね。きちんとはしてらっしゃいますけど、奥さんとかの話を知ることがないです」

大將がいった。

「酒は強いよね」

俺がいうと、大將は頷いた。

「まあ、大酒を飲むのを見たことないけど、酔ってるって思ったのは一度もないな」

俺はおかみさんを見た。

「ね、電話してきたのは、どんな感じの人？」

「どんな感じって、電話だもの。わからないわよ。男の人の声で——」

「若かった？ それとも白川さんくらいのお年寄り？」

「白川さんよりは若かったのじゃないかしら。『ますいさんですか。白川さんというお客さん

がいらしてませんか』って」

「妙だな」

大西さんがつぶやいた。

「妙って？」

「自分のことをあんなに話さない人が、どうしてここの電話番号を教えたんだろう」

「それって、そんなに変ですか」

俺は訊ねた。

「ここに電話してまで白川さんと連絡をとりたい人間がいる、というのは、よほど緊急の用事が発生するかもしれないからだ。じゃなければ、家の留守電にでもメッセージを残しておけばいい」

「そういわれりゃそうだ。白川さんは夜には家に帰るわけですものね」

大将が頷いた。

「なのに白川さんは平然としていた」

「でも早めに帰りましたよ」

おかみさんが壁の時計を見ていった。

「いつもなら七時くらいまではいらっしやるのに」

六時を二十分ほど過ぎている。

「緊急っていつても、その程度なのじゃないですか」

俺はいった。そして、

「おかみさん、俺もお勘定お願いします」

と腰を上げた。

「なんだ、フリーターも帰るのか」

「ええ。なんか負け疲れですかね」

「パチンコで一万五千円スっちゃったんだって」

おかみさんがいう。大西さんは顔をしかめ、首をふった。

「もう少し生産的な青春を過ごしたほうがいいぞ」

「帰って本でも読みます」

金を払い、「ますい」をでた。商店街を、駅と反対側に向かう。二十メートルほどいくと、左に折れる路地がある。そこを曲がって五十メートルほど進んだ右手が、俺の住むアパートだ。白川さんが住んでいるといったシンエイコーポは、斜め向かいにたっている。

俺は階段をあがり、二階の端にある部屋に入った。ユニットバスのついた1DKだ。ここに引っ越してきて二年になる。

窓を開けた。シンエイコーポの右側の部屋は、細い路地をはさんだ向かいにある。二階の窓は、特に真向かいだ。いつもカーテンがかかっていて、開いているのを見たことはなかった。

そのカーテンが開いていた。

白川さんがこちらを向いて立っている。

「白川さん！」

白川さんが窓を開けた。

「白川さんの部屋って、そこだったんですか」

俺は窓から身をのりだしていった。白川さんはにこにここと頷き、いった。

「若者に、話があります」

「え？」

「これからあなたの部屋にいったよいかかな」

「え？ かまいませんけど……」

俺はあせって部屋の中を見回した。本を別にすれば、散らかるほど、ものはない。食卓がわりのコタツとシングルベッド、あとは小さなすわり机だ。

「では——」

白川さんはひっこみ、窓を閉め、カーテンを引いた。

俺は窓ぎわのでっぱりに尻をのせ、下の路地を見おろした。小学生くらいの子供が三人、自転車で走りすぎた他は、誰もいない。ただテレビの音や、話し声が少しづつあちこちの家から洩れている。

平和で、俺は、この二階の窓からの眺めが好きだ。

シンエイコーポの玄関を、白川さんがでてくるのが見えた。まっすぐ路地をよこぎり、俺の住むアパートの外階段を上ってくる。

やがてドアが小さくノックされた。

俺は窓を閉め、玄関にいったドアを開いた。

「突然、お邪魔しますよ」

白川さんはいって、雪駄を脱いだ。

「ええと、どこでもすわってください」

白川さんは部屋に入ってくると見回した。

「きれいに住んでいますね」

「まあ、暇なんで、掃除はママにしています」

白川さんは頷き、窓ぎわに歩みよった。

「先ほどの電話のこと、気になっているのではありませんか」

俺はどきっとした。白川さんが「ますい」をでていったあと俺たちが交わした会話が聞こえていたかのようだ。

「えっ。それは……白川さんに電話なんて珍しいなと思って」

白川さんはふっと笑い、窓に顔を近づけた。

「早いな。やはりか」

とつぶやく。

俺は窓をふりかえった。下の路地に人がいた。あまり見かけないスーツ姿の男が二人だ。

「ここに二人。ということは、バックアップは四人か」

俺は窓を開けようと手をサッシにかけた。それを白川さんは止めた。

「やめなさい」

男のひとり、カーテンがかかった白川さんの部屋の窓を見上げている。もうひとりが携帯電話を上着からとりだし、耳にあてた。

白川さんの手が俺の腕を引っぱった。思いがけず強い力だった。俺はひきずられるように窓ぎわを離れた。白川さんの部屋を見ていた男がこちらをふりむいたのだ。

白川さんは窓ぎわの壁に隠れ、下を見た。

「大丈夫、見られてはいない」

「カーテン、閉めますか」

白川さんは首をふった。

「よけいなことをしてはいけない。変化はかえて目^めを惹^ひく」

男二人はシンエイコーポの玄関をくぐり、中に入っていった。

白川さんは窓ぎわを離れ、コタツの前にすわった。

俺はベッドに尻をのせた。

「何なんですか」

「一本の電話がこの町にひき起こした嵐だね。まだ小さな嵐だが」

白川さんは俺を見つめ、小さな笑みを浮かべた。

「彼らは私を受けとった伝言を知りたいのだと思う」

「伝言？ さっきの電話のことですか」

白川さんは頷いた。

「その伝言は、平和なこの町での私の生活を終わらせてしまった」

「よく、わからないですよ。何いってるんです？」

『『コベナント』だ』

『『コベナント』？』

俺は訊き返した。

「何ですか、それ」

白川さんは俺の目を見つめた。

「手伝ってもらいたい」

「何をです？」

「いろいろだ。『コベナント』は、私を現役に復帰させる合言葉なんだ」

「現役？」

白川さんは手にしていた巾着から平べったい箱をとりだした。開くと、細くて黒い葉巻が何本も入っているのが見えた。

「吸うかね？」

「葉巻、ですか」

「ますい」で白川さんが煙草を吸っている姿すら見たことがなかった。俺は首をふった。

「吸ってもいいかな」

「どうぞ」

白川さんは細い葉巻をくわえ、巾着からとりだした金のライターで火をつけた。深々と吸いこみ、濃い煙を吐きだす。いい匂いが部屋にたちこめた。

「いい匂いですね」

「ハバナの最高級だ。今、日本に入ってきているのは、ほとんど偽物ばかりだ」

白川さんはいった。目を細め、香りを楽しんでいるように見える。

「あの、何を手伝えばいいんです？」

俺は話を戻した。

「それは、私につきあってくれればわかる。若者は、体力に自信あるかな？」

「ふつう、です。特に頑丈というわけではありませんけど」

「運転免許は？ 私のA級ライセンスは、更新を忘れて失効してしまった」

「普通免許なら、あります」

「よしとしよう」

白川さんは頷いた。そして立ちあがった。

「君が懂れていたものに近づく機会だ」

「懂れてたって、スパイ？」

白川さんはにこっと笑った。

「ついできなさい」

「いや、あの、どこかへでかけるんですか。だったら準備とか——」

「ふだんとちがうことをしてはいけない。君が大好きなパチンコ屋さんにふらりとでかけるように、ここをでるのだ。当分は帰ってこれないが」

「えっ、そんな。ちょっと待ってください。だったら着替えとか——」

白川さんは笑みを消した。

「重たいスーツケースをひっぱって家をでていくエージェントがどこにいる？　これから任務につくと宣伝しているようなものだ」

「それはそうかもしれないけど、俺は——」

「私の言葉にしたがうほうがいい。好むと好まざるとにかかわらず、君は『ユベナント』の復活に巻きこまれている」

「よく、わからないんですけど」

「きたまえ。サンダルはよしたほうがいい。運動靴をはくんだ」

そういう自分は雪駄に足を通し、白川さんはいった。

俺はスニーカーをはき、白川さんにつづいて部屋をでた。白川さんは階段の踊り場に立ち、唇に指をあてた。目で、向かいのシンエイコーポを示した。

白川さんの部屋のカーテンが揺れている。誰かが中にいるのだ。

「泥棒じゃないですか」

俺は小声でいった。

「心配するな。盗られて困るものは何ひとつない。ついてきなさい」

白川さんは階段を降りると路地にでた。あたりを見回し、アパートの裏側にたっている一軒家に近づいた。十坪あるかどうかという、古くて小さなボロ家だ。いつも雨戸が立てられていて、ずっと空き家だと思っていた。郵便受けからは、チラシの類があふれている。

白川さんは巾着から鍵束をとりだした。ざっと十以上の鍵がついている。老眼のせいかな、その鍵束を目から遠ざけ、

「どれだっけ」

とつぶやいた。

「何してるんです？」

「この家の鍵を捜してる」

「えっ。ここ、白川さん家なんですか」

「基地のひとつだ。すまないが若者、鍵を見つけてくれないか。このタイプの鍵のどれかが合
う筈だ」

白川さんは鍵束を押しつけてきた。俺はうけとった鍵束を見つめた。家の鍵だけじゃなく、車の鍵らしきものもある。中にフェラーリのマークが入ったのもあった。

俺はらしき、鍵をひとつずつ、空き家だと思っていたボロ家の扉にさしこんだ。

みつつ目が当たりだった。鍵を回すと、カチッという音がして、錠前が外れた。ノブをつかんだ。

「待った」

白川さんが俺の肩をつかんだ。

「ここからは私がやる」

俺は白川さんと位置を入れかわった。白川さんはドアを細めに開けると、腰をかがめた。ドアのすきまに右手をさしこみ、難しい顔をして何かをさぐっている。姿勢のせいかな、顔が赤らんできた。

やがて、

「よし」

とつぶやき、腰をあげた。扉を開く。扉の内側に電線がぶらさがっていた。

「何です、これ」

電線の途中にスイッチらしきものがあり、白川さんがそれを探していたのだと俺は気づいた。

「高圧電流の装置だ。不用意に開くと二千ボルトの電流が流れる。一瞬だがね」

「えっ」

「さっ、入って」

白川さんは俺を家の中に入れ、扉を閉めた。まっ暗になる。

パチッという音がして、明かりが点った。俺はまぶしさと目に入ったものの両方に瞬きした。家の中はがらんどうだった。三和土の先に小さな廊下があって、その先は畳もない、木の土

台がむきだしだ。かわりにロッカーらしき金属製の箱がいくつもおかれている。

部屋の中央に作業台のような机があった。ほこりっぽく、クモの巣があちこちにかかっている。ひどくむし暑い。

白川さんが歩くと、ミシミシという音がした。天井からぶらさがった蛍光灯は工場のような「やれやれ」

白川さんはつぶやき、作業台に近づいた。古くさいブラウン管のテレビがのっている。スイッチをパチンと入れた。

四分割された画面が映った。その映像が何だか、俺には最初わからなかった。テレビ放送ではない。どこかの景色が映っている。

見覚えがある景色だと思い、気づいた。

シンエイコーポと俺のアパートがある路地だ。さらに路地の先、商店街からの入口も映っている。そこに男が二人、立っていた。

「さっきの連中のバックアップだ。当分ここをでられない」

白川さんはいって、呆然としている俺を尻目に、並んでいるロッカーのひとつを開くと、着物の帯をほどいた。ランニングシャツ姿になる。

それを見て俺は息を呑んだ。むきだしになった肩からシャツの下にかけて、古い傷跡がいくつもあったからだ。

斬り傷、そしてエクボのような傷跡は、小説で読んだ「銃創」にちがいない。

俺の視線に気づいているのかいないのか、白川さんはさっさと着替えを始めた。まず手にしたのは、アロハシャツだった。淡いクリーム色に幾何学的な模様が入っている。それからベ

ジュのパンツをはいた。さらに麻おぼと思しい、白のジャケットをだし、羽織おぼった。最後にパナマ帽をロッカーからとりだし、頭にのせる。

俺はあぜんとした。こんなお洒落をしている白川さんを見るのは初めてだ。

白川さんは別のロッカーを開いた。そこにスニーカーからブーツに至るまで、さまざまな靴が並んでいた。白と茶のコンビの靴を白川さんは選び、足を通す。

「若者、彼らはまだ映っているか」

ロッカーの扉の内側にある鏡に自分の姿を映しながら、白川さんは訊ねた。

俺はテレビをのぞきこんだ。男たちはいなくなっていた。

「いなくなってます」

「連絡係のところかな」

白川さんはつぶやいた。そしてロッカーの扉を閉めると、床にかがみこんだ。畳をはめこむ土台の板に手をかけ、一枚をめくった。できた空間に腕をさし入れ、ジュラルミンのアタッシェケースをひっぱりあげた。

アタッシェケースを作業台の上におくと、番号錠にかがみこみ、舌打ちをした。

「しまった。老眼鏡を忘れてきてしまった」

俺をふりかえった。

「すまないが、この番号を合わせてもらえるかね。ナンバーは、811だ」

俺は頷き、歩みよると、ダイヤル式の番号錠を合わせた。白川さんは留め金を外し、アタッシェケースを開いた。

「嘘うそっ」